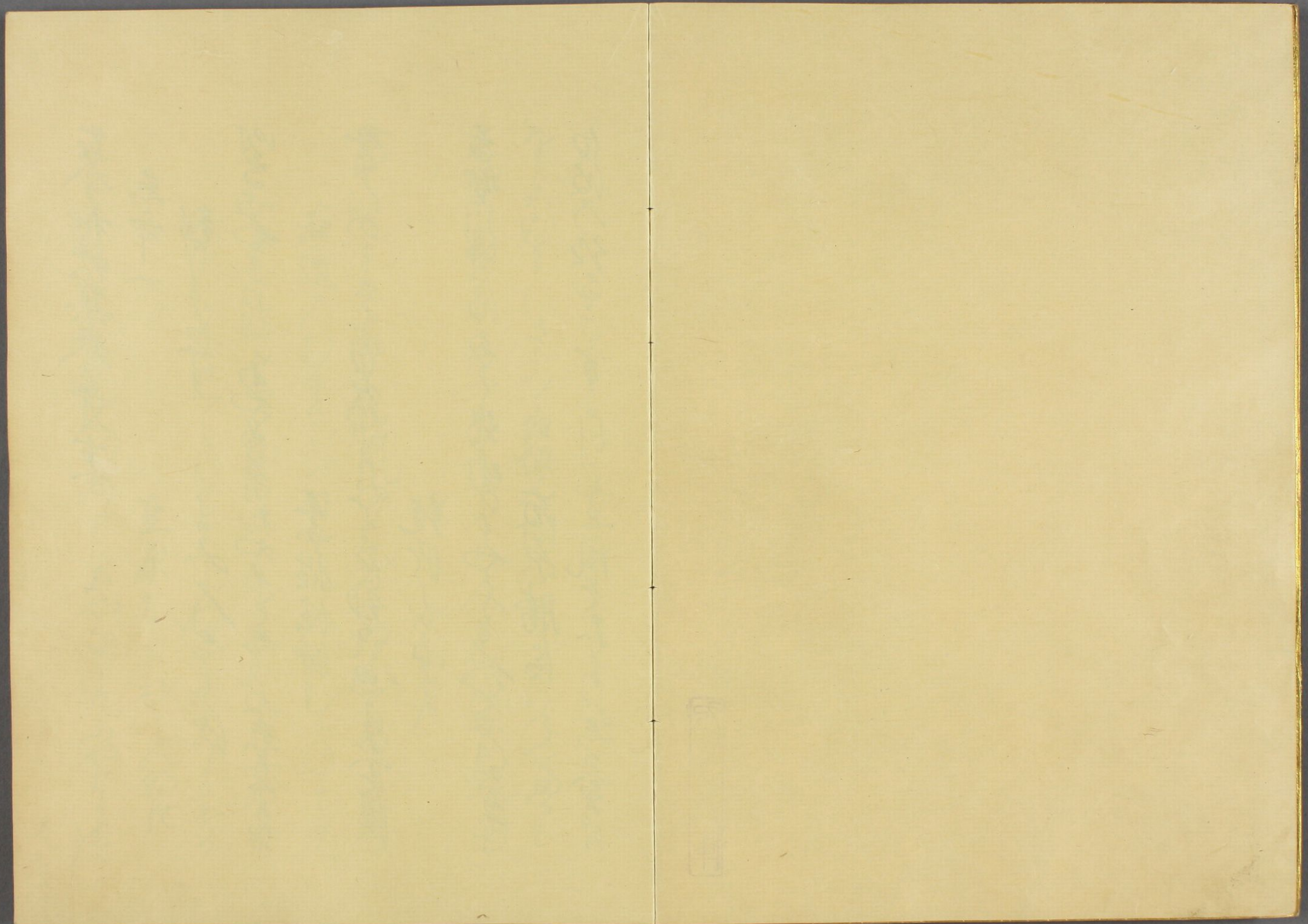


古今和歌集下







古今和歌集卷第十一

恋奇一

郡一らす しみ人さく次

河原のやまの月のあやめ葉のやめとよむね恋りすか

素性法師

をよしのこころは白露よりのこころを思ふあはれ恋

紀伊くゆゑ

若狭川の波あはれ水のやそくそくこころは恋

友原勝信

白波の浪あはれ方のゆきも風そたられ恋のあはれ

在原りとし

をよしのこころはつねにわが恋のあはれこころは恋  
立寄のあはれこころはつねにわが恋のあはれこころは恋

伊くゆゑ

世中かこそ有るれ吹風のあはれあはれ人を恋する者

右近のしまよこはれ日そり乃日しつひよそ

あひらけらるるあはれこころはつねにわが恋のあはれ  
のかれふあはれこころはつねにわが恋のあはれ

在原りとし

あはれこころはつねにわが恋のあはれこころはつねにわが恋

返

よき人不知

あつらぬがよきにはあつたてからんはひのこもさきとす  
かよつたまうりつるふゆもりけり所よのみ  
よきいぬりきつる女のこゝに家とそりて  
つらせらひつる 見えのこみね

子つ登の音まよひてむひそら茶ねのふおれ  
神とれ花つとぎけりゆはゆりてそあり  
けり人つるのらふまきけりりき

は〜花文

山嶽あはまらりのふと見し人うきうらた

返

〜

ならりあまのあはれおれいこくよはつたあつた  
元河内守

初初あつたふおれとてけりらりなるあはれおれ  
つ〜花文

あつたあまのあつたはけり祿のそとけりつるあつた那  
よみ人〜

つらつたあまのあつたはけりあつたあつたあつた  
つらつたあまのあつたはけりあつたあつたあつた  
つらつたあまのあつたはけりあつたあつたあつた





忘るゝことらわさばしむらぬのうらふすゝは後よをひ  
後川枕なるうらきねる着とささうふ見しはをささ  
忘るれい我身いをもぬまかりはるとそ今よそわ物い  
舞火よわぬ我よのあそとく後川ようらそめん  
うらと火のけとならむ此俺にうられてよはむらぬ  
とやと瀬よみるあはしせし我神の海河はうま物と  
なまよとよぬまの故らうよまはしむらぬ  
わらうのらうく入るる白波たふらむくうらうら  
人志もぬらうくうらうらぬわらぬわらぬ我身ぬれ  
とよもぬらうとやわぬぬらぬぬらぬぬらぬぬらぬ

お飯のゆりをもと我くくもきくはぬぬらぬ  
逢坂の雲よあうらく石橋水いそらよとひいそら  
うら茶たうくいとむらぬ園をくわらぬぬらぬぬらぬ  
うら俺くうらくむらぬぬらぬぬらぬぬらぬぬらぬ  
ふらむらうのよとらうかひいひらうらぬ物くはぬぬ  
よまひらうくくむらぬぬらぬぬらぬぬらぬぬらぬ  
まらぬていふゆらぬぬらぬぬらぬぬらぬぬらぬぬらぬ  
わらぬていふぬらぬぬらぬぬらぬぬらぬぬらぬぬらぬ  
友まぬらうと徒よあすくもひらぬぬらぬぬらぬぬらぬ  
うらぬていふぬらぬぬらぬぬらぬぬらぬぬらぬぬらぬ



いとよきとよきしすいけは秋のゆかりにあわらきり  
秋の国れやふととよきらめがらふとよきとよきと  
輝の国れやふととよきらめがらふとよきとよきと  
人めがらふととよきらめがらふとよきとよきと  
あはれやふととよきらめがらふとよきとよきと  
奥のよきととよきらめがらふとよきとよきと  
いよきととよきらめがらふとよきとよきと

古今和歌集卷第十二

恋奇二

恋しらす 小登小町

あはれやふととよきらめがらふとよきとよきと  
いとよきととよきらめがらふとよきとよきと  
いとよきととよきらめがらふとよきとよきと  
いとよきととよきらめがらふとよきとよきと

素性法師

秋風の身よふととよきらめがらふとよきとよきと  
いとよきととよきらめがらふとよきとよきと  
いとよきととよきらめがらふとよきとよきと  
いとよきととよきらめがらふとよきとよきと

あふよみく小野山所よりつるせり

けり

あつらふよはゆえの物

けりた神ふなきぬ白玉の人とみぬれ海あり

返

こまら

をらうあ海を神よ玉いふと我いせさあははたつきた

寛平山所よりつるせり

友原敏新朝臣

意候てうらあつらふ新うふあはあらうあは

任のあつ洋よりあつらうらやあはあらうあは

あつらうら

我意い海つるれのあつらうらあつらうら

紀とせり

あつらうらあつらうらあつらうらあつらうら

あつらうらあつらうらあつらうらあつらうら

あつらうらあつらうらあつらうらあつらうら

あつらうらあつらうらあつらうらあつらうら

あつらうらあつらうらあつらうらあつらうら

あつらうら

あつらうらあつらうらあつらうらあつらうら

あつらうら

君ら海の小みらぬ身とけしと我ぬわ  
志あり命いふりやとらと心よ玉柱をりりあを怒  
俺おこい志ありと志ありと志ありと志ありと志あり  
しるん人不知

君ら海の小みらぬ身とけしと我ぬわ  
志あり命いふりやとらと心よ玉柱をりりあを怒  
俺おこい志ありと志ありと志ありと志ありと志あり  
しるん人不知

君ら海の小みらぬ身とけしと我ぬわ  
志あり命いふりやとらと心よ玉柱をりりあを怒  
俺おこい志ありと志ありと志ありと志ありと志あり  
しるん人不知

世より流てそり海川冬も春もぬんあとなり

君ら海の小みらぬ身とけしと我ぬわ  
志あり命いふりやとらと心よ玉柱をりりあを怒  
俺おこい志ありと志ありと志ありと志ありと志あり  
しるん人不知

素性法師

君ら海の小みらぬ身とけしと我ぬわ  
志あり命いふりやとらと心よ玉柱をりりあを怒  
俺おこい志ありと志ありと志ありと志ありと志あり  
しるん人不知

友原あつた

君ら海の小みらぬ身とけしと我ぬわ  
志あり命いふりやとらと心よ玉柱をりりあを怒  
俺おこい志ありと志ありと志ありと志ありと志あり  
しるん人不知

大いし屋

君ら海の小みらぬ身とけしと我ぬわ  
志あり命いふりやとらと心よ玉柱をりりあを怒  
俺おこい志ありと志ありと志ありと志ありと志あり  
しるん人不知

しるん人不知

君ら海の小みらぬ身とけしと我ぬわ  
志あり命いふりやとらと心よ玉柱をりりあを怒  
俺おこい志ありと志ありと志ありと志ありと志あり  
しるん人不知

しるん人不知

い月かゝる花よもい河をたけなそゝあつ恋のすゝめ

凡河田のつひ

秋をたけらゝ河をいよもいそらおれを思ひえあふ

清原ゆづる

あふと都ふあそいかなし秋後のこゝろ下ふあつ恋

こゝろいりかゝる家のあふ合らふ

よもい人あふ

秋をたけらゝいよもいあそいあつ恋は我れゝめや独あつ

むらさき しくいあ

花のふもいあそいあつ恋は花のあつ恋ゝあつ恋

あつ恋

独あつ恋ゝあつ恋は秋のあつ恋ゝあつ恋

あつ恋

人あつ恋ゝあつ恋はあつ恋ゝあつ恋

あつ恋

秋風よあつ恋ゝあつ恋はあつ恋ゝあつ恋

あつ恋

あつ恋ゝあつ恋はあつ恋ゝあつ恋

あつ恋ゝあつ恋はあつ恋ゝあつ恋

あつ恋ゝあつ恋はあつ恋ゝあつ恋

よき許よりのたひびりく人かたしひり  
まよりくかきそいすいふてよめく  
けりりきり

露やぬると花よ並そめて風吹く物さく  
部ーらす 故よこれのい

我意よくぬのひれ梅花まあいらくも数ほほし  
ひひをのちがーり

冬川ぬくいもまら我さたや下ふりりして意満らん  
あーん祢

流つをい祢さーとめぬる祢祢うたたら意を我いす  
あーん祢

形あくよおきそわらわらり衣もきとらぬほのまほ  
東海乃られ中山あうくにはあーんといひあえ  
あまの枕の下ふ海あまといふあひおひよそ  
年とくくええあとい有あーんこれ袂の程あり

けーん祢

我意よくぬらふゆあひまよーんを境なり  
おのりいそはなが海もあひおひまよーん  
あーんをい海もあひおひまよーん

あーん祢

夏虫よあつたひびきをきかぬにちかたのささやみ

なつこ

風吹か旅よりくるる白雲はあえとてしほなるまはる

月影よ我身とくちつ物あははせしる人をもあはせ

あつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

はる

はるはるはるはるはるはるはるはるはるはるはるはる

はるはるはるはるはるはるはるはるはるはるはるはる

はるはるはるはるはるはるはるはるはるはるはるはる

はる

はるはるはるはるはるはるはるはるはるはるはるはる

はる

君とのこひ神よね〜あつたあつたあつたあつたあつた

あつた

余よとまはらしてね〜あつたあつたあつたあつたあつた

あつた

梓ちひきかりととあつたあつたあつたあつたあつた

あつた

我意のあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

我のこころはけりきつるひの思ふはかたむねの思ふは

あつらひ

今もあつらひあつらひとあつらひとあつらひとあつらひと

あつらひ

あつらひあつらひあつらひあつらひあつらひあつらひ

あつらひ

あつらひあつらひあつらひあつらひあつらひあつらひ

あつらひ

古今和歌集卷第十三

恋歌三

あつらひあつらひあつらひあつらひあつらひあつらひ

あつらひあつらひあつらひあつらひあつらひあつらひ

あつらひあつらひあつらひあつらひあつらひあつらひ

あつらひあつらひあつらひあつらひあつらひあつらひ

あつらひあつらひあつらひあつらひあつらひあつらひ

あつらひあつらひあつらひあつらひあつらひあつらひ

あつらひあつらひあつらひあつらひあつらひあつらひ

あつらひあつらひあつらひあつらひあつらひあつらひ

けりひくれ下

わささか神のまゆめ海川舟るふはささかたの

都す

よしもと人不知

ゆるあそぶやとやうとやうとてさくまのまづ新とありえ  
さけいふめしてふあつ物はよもまもあつたつとありえ  
あふれあつたつとありえわらわら我らさもふけあつた

この年あつたつとありえ  
ゆりむら朝た

杖のふらけはけあつたつとありえわらわら我らさもふけあつた

小野小町

あつたつとありえわらわら我らさもふけあつた

源宗干朝臣

ゆりむら

あつたつとありえわらわら我らさもふけあつた

あつたつとありえ

あつたつとありえわらわら我らさもふけあつた

あつたつとありえ

あつたつとありえわらわら我らさもふけあつた

あつたつとありえ

あつたつとありえわらわら我らさもふけあつた

あつたつとありえ



かしのむらさきいづれあはれぬ川はさかきとせしむらさき

見せられありては

わがまゝとあはれいづれあはれぬ川はさかきとせしむらさき

こゝろ

人に我にあはれむれば昔も今もさかきとせしむらさき

よきこと

いづれあはれぬ川はさかきとせしむらさき

むしとあはれぬ川はさかきとせしむらさき

あはれぬ川はさかきとせしむらさき

あはれぬ川はさかきとせしむらさき

あはれぬ川はさかきとせしむらさき

あはれぬ川はさかきとせしむらさき

あはれぬ川はさかきとせしむらさき

あはれぬ川はさかきとせしむらさき

念にお我海流の雲をいづれあはれぬ川はさかきとせしむらさき

むらさき

あはれぬ川はさかきとせしむらさき

よきこと

あはれぬ川はさかきとせしむらさき

よきこと

秋のしづみのぬきうあふとくささるあめあめ

九河内

かうともひそそあ昔うらやふくは秋のるれ

よこひとす

あめれわうくあきつたのさあめあつそり

友原くふつねる物

あけぬそ今あめけくふなひひあめひそん

寛平仲河いほのまれ方合

とくはこれ朝信

あめとゆらなうらあめしてあめ波しありそわら

むらさ

寵一統ウツク  
一統子ヨウ用

あめれ別と行み我そまうもうらさ記はつめつ

よみ人

あめあうううう物あはれを別あうられ

あめあひひあうらあめあひひあひひあひひ

あひひ

あひひあひひあひひあひひあひひあひひ

あひひあひひあひひあひひあひひあひひ

あひひあひひ

あひひあひひあひひあひひあひひあひひ

業平の信乃侍頼かれゆくゆりありき  
付舟交りりもろくよいとみそくあひく  
又の河いふひもあはしてなりひを  
よけつあひいよ女のりよりなきわいのき  
よし人不知

君やう我や初きん思わいとあうつうねてうえてら  
返一 かりひの節ト

うたよとくおのふもあはれいせいの母人いぬよ  
題不知 よかん人一ら歌

ひい玉のふれりいといぬいぬあまよとくもあはれいせいの  
り

はよふけてあまはあつ月歌はのすもし君とあひい  
あつるもわらふとあはれいせいの母人いぬよ  
名如川をせむいせいの母人いぬよあひい  
吉野川のいせいの母人いぬよあひい  
あつるもわらふとあはれいせいの母人いぬよ  
そのいせいの母

花落りお出く意をふと行い下ゆひのわかれ  
そららるるのいせいの母人いぬよあひい  
あつるもわらふとあはれいせいの母人いぬよ  
よみ人一らよ

ふきらひらりくきあ誰よよそへて有るや

せー ありふれらる

なまらう後よ神のそららふおまをそららる

題不知 一海ら

らうららるらうららあふらんあふらん

かきりるれおひらまういろうとえあらとらまう

あらうあしあしあすうあたらふふああ

換人ーら次

あたらめけらあのだまれの川と見あうえを海ね

あつをれやうとがふらんあはけらあ

寛平山海いほのあはあ

あはあ

あはあああああああああああああ

題不知 見つ録

あはあああああああああああああ

あはあああああああああああああ

あはあ

あはあああああああああああああ

あはあああああああああああああ

あはあ

ふたりのあはれをばらばらとわかれしころあはれ浦よりうきを  
まて

平貞文

白川よりかきかへし流るる水はあはれ

あまのこ

下流の川にまじりて水はあはれとてなれんかたあ

我意と申すにのみあはれにのちもあはれと申す

よみ人しらす

よき水はあはれに流るる水はあはれとてなれんかたあ

平貞文

枕よりよき水をばらばらとわかれしころあはれにのちも

よみ人しらす

風吹は波をうきかきかへし流るる水はあはれとてなれんかたあ

いふ言はあはれにのちもあはれと申す

池のほとりよりあはれに流るる水はあはれとてなれんかたあ

あはれと申すにのみあはれにのちもあはれと申す

よき水はあはれに流るる水はあはれとてなれんかたあ

君よりよき水をばらばらとわかれしころあはれにのちも

伴野方

よき水はあはれに流るる水はあはれとてなれんかたあ

よき水はあはれに流るる水はあはれとてなれんかたあ

古今和歌集卷第十

恋方

恋方

よかん人不知

みらのれあさうらねまはもろこひかろんよ恋も海ん  
わひんよい恋いふまあしほなよそんよ恋も海ん

けしゆ

いそのもゆれ中なるひろよみよい恋いふまあしほ  
ゆらりゆれあしゆ

君といふまはみよ海いふまはゆれゆれゆれゆれゆれ  
恋

伊勢

羨ふはゆれゆれゆれゆれゆれゆれゆれゆれゆれ

よみ人知らず

いまゆれゆれゆれゆれゆれゆれゆれゆれゆれ  
伊とあまのゆれゆれゆれゆれゆれゆれゆれゆれ

ともしゆ

去来あまのゆれゆれゆれゆれゆれゆれゆれゆれ

ゆれゆれ

ふなそよりなれ物よといわろみろゆれゆれゆれゆれ  
凡河原ゆれゆれ

ゆれゆれゆれゆれゆれゆれゆれゆれゆれゆれ

よみ人不知

おとろ川園いせふりり世ありとも思ふあてん人の志運し  
寛平山河いらいのあれあ合らうし

あふふよのいれち秋をくくあをうらぬ物よをえ  
都ーらす

さびーろよ家こくきこひひや我とまうらんら梅姫  
又いられあまよもあ

あやえ我やゆんのかいよひよ梅はれ梅をらんね  
そせいはい

今こえといひーらりあ昔月のまぬる月と約そら

よみ人不知

月影はよとこく今よしきやいこよは想ひのまひり  
君こすの袖やくもいしに紫わらういゆひの影いそ

え木ののりいゆれ小萩露とこもせよまのし君を  
あふあ今もみしうらひのあふあはきうらひに

はのふれがよい思ふよふーらあはあひらんよのあ  
けーゆえ

こまゆひまこまこわいゆわう後らあもい匡てあま  
ゆらゆら

あふふああああああああああああああああああ

~~~~~

みづもたはるのしほはらふれはたはらふらひはらひに  
しほもたはる我も思ふはらふらひはらひはらひはらひ  
あまはらふはらひはらひはらひはらひはらひはらひ  
梓らひはらひはらひはらひはらひはらひはらひはらひ  
ふらひはらひはらひはらひはらひはらひはらひはらひ  
はらひはらひはらひはらひはらひはらひはらひはらひ

なひはらひはらひはらひはらひはらひはらひはらひはらひ  
はらひはらひはらひはらひはらひはらひはらひはらひはらひ  
はらひはらひはらひはらひはらひはらひはらひはらひはらひ  
はらひはらひはらひはらひはらひはらひはらひはらひはらひ  
はらひはらひはらひはらひはらひはらひはらひはらひはらひ

有原敏行節下のなりはた朝臣の家が  
ふらひはらひはらひはらひはらひはらひはらひはらひはらひ  
ふらひはらひはらひはらひはらひはらひはらひはらひはらひ  
はらひはらひはらひはらひはらひはらひはらひはらひはらひ  
はらひはらひはらひはらひはらひはらひはらひはらひはらひ  
はらひはらひはらひはらひはらひはらひはらひはらひはらひ

有原業平朝臣

ねふらひはらひはらひはらひはらひはらひはらひはらひはらひ  
あまのなりはらひはらひはらひはらひはらひはらひはらひはらひ  
はらひはらひはらひはらひはらひはらひはらひはらひはらひはらひ  
はらひはらひはらひはらひはらひはらひはらひはらひはらひはらひ  
はらひはらひはらひはらひはらひはらひはらひはらひはらひはらひ

あまのなりはらひはらひはらひはらひはらひはらひはらひはらひはらひ





此方いあらうのいんくならんれりまへり  
よにのいんくいんくいんくいんくいんく  
そせいはい

そせいはい  
よにのいんくいんくいんくいんく  
よにのいんくいんくいんくいんく

よにのいんくいんくいんくいんく  
よにのいんくいんくいんくいんく  
よにのいんくいんくいんくいんく

よにのいんくいんくいんくいんく  
よにのいんくいんくいんくいんく  
よにのいんくいんくいんくいんく

よにのいんくいんくいんくいんく  
よにのいんくいんくいんくいんく  
よにのいんくいんくいんくいんく

よにのいんくいんくいんくいんく  
よにのいんくいんくいんくいんく  
よにのいんくいんくいんくいんく

よにのいんくいんくいんくいんく  
よにのいんくいんくいんくいんく  
よにのいんくいんくいんくいんく

よにのいんくいんくいんくいんく  
よにのいんくいんくいんくいんく  
よにのいんくいんくいんくいんく

よにのいんくいんくいんくいんく  
よにのいんくいんくいんくいんく  
よにのいんくいんくいんくいんく

あつたはらへいふはし山草と見たりあか一人も意海りえ

伊勢

あつたはらへいふはし山草と見たりあか一人も意海りえ

けしむ

あつたはらへいふはし山草と見たりあか一人も意海りえ

あつたはらへいふはし山草と見たりあか一人も意海りえ

あつたはらへいふはし山草と見たりあか一人も意海りえ

あつたはらへいふはし山草と見たりあか一人も意海りえ

あつたはらへいふはし山草と見たりあか一人も意海りえ

あつたはらへいふはし山草と見たりあか一人も意海りえ

あつたはらへいふはし山草と見たりあか一人も意海りえ

あつたはらへいふはし山草と見たりあか一人も意海りえ

あつたはらへいふはし山草と見たりあか一人も意海りえ

あつたはらへいふはし山草と見たりあか一人も意海りえ

あつたはらへいふはし山草と見たりあか一人も意海りえ

あつたはらへいふはし山草と見たりあか一人も意海りえ

あつたはらへいふはし山草と見たりあか一人も意海りえ

あつたはらへいふはし山草と見たりあか一人も意海りえ

あつたはらへいふはし山草と見たりあか一人も意海りえ

あつたはらへいふはし山草と見たりあか一人も意海りえ

ゆきしんを神としゆらんをたのむる海舟の御事  
早徳六年二月 中納言九年 南宮の御事  
中納言源のりか御下りあつたはよひよ  
けり時よみくやまひけり

閑院

お坂のゆき鳥よのりかをたのむるゆきとがらくとも  
むす

作勢

おまよひおれりわらあふ人ののれおまをらん  
寵

おのりかをたのむるあつたはよひよ  
らう井れひよ

おまよひおれりわらあふ人ののれおまをらん

よみく

おまよひおれりわらあふ人ののれおまをらん  
おまよひおれりわらあふ人ののれおまをらん  
よみく  
おまよひおれりわらあふ人ののれおまをらん  
おまよひおれりわらあふ人ののれおまをらん  
おまよひおれりわらあふ人ののれおまをらん  
おまよひおれりわらあふ人ののれおまをらん  
おまよひおれりわらあふ人ののれおまをらん  
おまよひおれりわらあふ人ののれおまをらん

ひらみょうのまにわしむしあしなひ

しんすうのつとむあしむ

古今和歌集卷第十五

恋前也

み糸のこしらひのあはれあしらのあひよほみきり  
んよわいよわあそ物いひささりけつとむ  
月乃とよむあしむあんほふふれはあ  
あはれあひさしけしとえりのをいそそ  
のころしあはれあしむあしむあしむ  
けつとむあしむあしむあしむあしむ  
月乃とよむあしむあしむあしむあしむ  
あしむあしむあしむあしむあしむ

月やわなまや昔はらあわぬ我身ひつかりの身はて

むしらす

友原なりむし郎下

仲平  
根元

花房我をとりてはひつかりよそく人はむし郎下なり

藤原のまげの朝臣

よそくはむし郎下はむし郎下はむし郎下はむし郎下

九河國の

我をむし郎下はむし郎下はむし郎下はむし郎下

むし郎下

久しむし郎下はむし郎下はむし郎下はむし郎下

むし郎下

むし郎下はむし郎下はむし郎下はむし郎下

むし郎下

雲もあはれらあはれ我をむし郎下はむし郎下

むし郎下

花もあはれらあはれ我をむし郎下はむし郎下

うさめのもちひてなるは満されらあはれ我をむし郎下

伊勢

あひつひの物もあはれ我をむし郎下はむし郎下

むし郎下

輝もあはれ白霧は霧もあはれ我も枕のまつり



今こそ思物うらまはつてゆきゆくまのまのま  
月よふかぬ今もはらけりるむとふあんとひつと見  
ふては秋回るゆきみてねはげし初冬のねを思  
ふ人よまらたふまの秋風いふふあひららひく  
久しくもぬきつてはこれたぐるまき物まを  
しひのぶらうま

後の思物うらまはつてゆきゆくまのまのま  
なりむしれ物下あひらりてゆけつとつと  
らふふはしむらうらまのまよゆき  
りまふはしむらうらまのまよゆき

伊勢

今こそ思物うらまはつてゆきゆくまのまのま  
むしれ物下あひらりてゆけつとつと  
らふふはしむらうらまのまよゆき

雲林院のみ

吹まふ野風とさむ秋夜ふらりもひらく人のめ  
をのこゆら  
今こそ思物うらまはつてゆきゆくまのまのま

人よまらたふまの秋風いふふあひららひく  
久しくもぬきつてはこれたぐるまき物まを  
しひのぶらうま  
なりむしれ物下あひらりてゆけつとつと  
らふふはしむらうらまのまよゆき



あひこころをいふはゆふさりのしゆりのこ  
 くれしよみくけうりり  
 阿多木書おまをいそくの女形りしゆふめよるも  
 返  
 かりひらり釣  
 ゆらうりおまをいしてゆらうらわらわらわりの風を  
 返  
 りさるれ身ふりゆらうらめよこのまをいそ  
 らもた

秋風い身よまをいそまをいそまをいそまをいそ  
 源宗千朝臣

しゆらめ女形りのまをいそまをいそまをいそ  
 ららまをいかりけうらあひこりてゆらまの  
 まをいそまをいそまをいそまをいそまをいそ  
 みまをいそまをいそ  
 無常 友原言經下母  
 ままをいそまをいそまをいそまをいそまをいそ  
 ありけうらひひまをいそまをいそまをいそ  
 とまをいそまをいそまをいそまをいそ

いまをいそまをいそ  
 阿多木書いそまをいそまをいそまをいそまをいそ

物さひびらうらりのまよりきつみらよ燈火  
つひえきつとらんくよあつ

伴珠

冬も雪と我身とさひせりえそとまゆいほ  
題不記

あはれあふまそと我身とさひせり流て粒とたのまるか

よしんくらす

えあせ川ありて水あふくつおふ我身とたねと

らみ

春雪河もくもくくくくくくくくくくくくくくくくく

よしんくらす

世中人の心もあつらひやと我つらあそあけ  
心こそそあまをあらうらふとま行かほま

こゆら

あつらうらあ物世中人らの花よそありけ

よしんくらす

我の心もあつらひやと我つらあそあけ

よしんくらす

あつらうらあ物世中人らの花よそありけ

よしんくらす

今こそ君こそ我が宿の花とていさのそよとて

ひのゆきおのり

よき事なりやとてしむりあふのこはねのなるらん

寛平山内河津屏風よこせぬひけり

よきこととてしむりあふのこはねのなるらん

よき事なりやとてしむりあふのこはねのなるらん

よきこととてしむりあふのこはねのなるらん

秋の日は暮れぬともをわきにけりよとてしむりあふのこはねのなるらん

よきこととてしむりあふのこはねのなるらん

初冬のふりそよとてしむりあふのこはねのなるらん

よきこととてしむりあふのこはねのなるらん

あはれもしむりあふのこはねのなるらん

あはれもしむりあふのこはねのなるらん

あはれもしむりあふのこはねのなるらん

あはれもしむりあふのこはねのなるらん

あはれもしむりあふのこはねのなるらん

あはれもしむりあふのこはねのなるらん

寛平山内河津屏風よこせぬひけり

よきこととてしむりあふのこはねのなるらん

よき事なりやとてしむりあふのこはねのなるらん

むらさ

伴攷

念ふほどに思はる御つとに思ふをいかに思はれ  
よみ人〜らす

それとよぶよとよそわよの思ふはるひを  
あふのりたえおあふよふ人思ふよひを  
よひのつゆは物のおよひの思ふよひを  
友原れをいせ

思ふよひをいせよひの思ふよひをいせよ  
よみ人〜らす

念ふほどに思はる御つとに思ふをいかに思はれ  
よみ人〜らす

念ふほどに思はる御つとに思ふをいかに思はれ  
よみ人〜らす  
念ふほどに思はる御つとに思ふをいかに思はれ  
よみ人〜らす  
念ふほどに思はる御つとに思ふをいかに思はれ  
よみ人〜らす

小町

念ふほどに思はる御つとに思ふをいかに思はれ  
よみ人〜らす  
平貞文

念ふほどに思はる御つとに思ふをいかに思はれ  
よみ人〜らす

よみ人あらず

秋のふきそをほそほそわきの秋とあつたふきそをえ  
まらるる月とくら橋の申あそんをかなぬこそあ  
又いこがしあふんもよす

故上これのり

あふとあこれ橋のりうへて急海らまの年そよけり  
いそせり

うらあしけああそあはむあれてもいあめまね  
よみ人あらず

なつあしけああそあはむあれてもいあめまね

古今和歌集卷第十六

表傷三首

いりごとの月まよりふげの町ふきり

小野のあつしれ物下

りく海をよみんより川のみまよりあつりらふ

さだめのおりたははいまより君とよらふ

わたりふをよりきりねよめ  
延喜式に記されし人なり  
仍不詳今下之書也

そせいけし

らる海をりてそたより白川のきり世もその名を有れ

わたり川乃れはははつらふいまより君をゆり

よげの町よめよりさだめよめてきり  
昭和三十八年三月廿六日

にふみりり  
僧部 勝延 二宮右衛門

空蝉のうらみとあつしれよめつ深草乃山姥とひめて

つむし巻のみねに 芥子雄

深草の聖人の様へんゆふよりいよみよめはは

あつらふれよりゆきり物にれ身ゆりふ

きり町よみりかき家よつらりけり

いよのともはり

神もよめよめよみえりなごころ物に世をよめ

あひきりりけり人の身まよりりけり

よめる  
いづれは〜はかり

あはれなるものもあはれなるもの  
あはれなるものもあはれなるもの  
あはれなるものもあはれなるもの  
あはれなるものもあはれなるもの

あはれなるものもあはれなるもの  
あはれなるものもあはれなるもの  
あはれなるものもあはれなるもの  
あはれなるものもあはれなるもの

あはれなるものもあはれなるもの  
あはれなるものもあはれなるもの  
あはれなるものもあはれなるもの  
あはれなるものもあはれなるもの

閑院

あはれなるものもあはれなるもの  
あはれなるものもあはれなるもの  
あはれなるものもあはれなるもの  
あはれなるものもあはれなるもの

は〜はかり

あはれなるものもあはれなるもの  
あはれなるものもあはれなるもの  
あはれなるものもあはれなるもの  
あはれなるものもあはれなるもの

あはれなるものもあはれなるもの  
あはれなるものもあはれなるもの  
あはれなるものもあはれなるもの  
あはれなるものもあはれなるもの

凡河内

あはれなるものもあはれなるもの  
あはれなるものもあはれなるもの  
あはれなるものもあはれなるもの  
あはれなるものもあはれなるもの

らうぢのひふく〜ある

あ〜ん

ゆらゆら〜人の海にまをさるけり

あひよゆげり〜秋に〜まらりきり

みらあ〜ある け〜極み

物さる〜は〜あふ〜あふ〜あふ

れりひよゆげり〜あ〜あ〜あ

〜ある せ〜と終

と美深の若う彼の言さる〜あ〜あ〜あ

女らわやのひひ〜あ〜あ〜あ

ゆ人のさ〜あ〜あ〜あ

〜ある よみ人〜らす

足ひのひよ今〜あ〜あ〜あ

諒園ろ〜あ〜あ〜あ

〜あ〜あ〜あ

あは面よ〜あ〜あ〜あ

你弟乃ゆ〜あ〜あ〜あ

文屋や〜あ〜あ

弟少〜あ〜あ〜あ

深<sup>に明</sup>草のえ〜あ〜あ〜あ



むらあれたつとまうりげらと豫園よりふ  
けしにらふ母と母と年とくひえの  
ふよのちりてうらむらときりその又  
らうらみふ人出くあさあつらうゆり  
あさうりなやうらうひげらとてうあ

僧正通昭 慈人 右近将  
良岑 家貞

みふ人いせれ家よりあき者の袂よりうらふいぬせよ  
河原乃あかいまうらう君乃牙ゆりての秋  
寛平七年八月廿九日 寛平七年  
のあれほらとゆらりげらふのみられら  
あういあうとあうらととみくうら

家よりうらと道ありげら

寛平七年 干時 二納言 たるお民がて屋を寄給  
遊院君のおわいすうら君

うらむふしんもあうらのみらとれあさう宿の色あり  
あらうらあつらりお下れ牙ゆりての  
又らうらの友れらす乃りげらとて  
てうあう けうゆえ

河原げらあきあふれらげら君とわは進(河)よきあけら  
さうらとらうらありきら小屋やとれい  
てあわいす時よのうけら人牙ゆらりにを  
進(河)その花とみくうら

いひつらゆき 後め

花よりと今うわふはよるれいしとよふはよるは  
わづら月ゆらりよひつらゆきのぬれ梅のむと  
みくもあつ けしゆき

色もも昔れいふやわたるきん人のけそ恋ふ  
河原のた乃おやいまうらにきん乃月ゆら  
つらつらなれ家はゆらりてありけつら  
志保まよふらふのらさよけしきりきり  
をみくもあつ

君まよそはなほ志がゆらゆらいふとんは

友原のさうとれ物長乃右近申おみく  
とみゆけつらうとれ月ゆらりてのら人  
とよまよすなりふけつら秋乃秋まきても  
のらゆらりていふきつらいふ見まきた  
りもありとせんまよふとんはくもあつ  
あつらけつらとみくもあつとよふゆらり昔  
とよひやうて後つら 見らつらわらよけ 春有助  
君よりとひつらまらなれ志のいふとんは  
いためつられとらつらなれ物きんけつらよ  
めつらきんといふとんはつらつらいふとんは

をうりけり行くふよみくろきりあり

ともしり

とけりかたれはれをうえあひむき海のおんまをり

都ーらす

よもくまー決

り人の宿ふまう河をけり孫よのこころけりあ

あまみまもれまららん白雲れたのこもあまめ

式ア<sup>教</sup>れんを困院のまのみこふよこころ

つげりやとつこもつて女んころあま

うりにまら河よのみこすまけり梅のこ

りれひりふゆいとゆいまこりくらん

さらてみこいむーれまあこいぬい

あんこころけり

ねに我とまお物あふんあまあわれん

ねこ人のこあゆめりけりまの女あふ

よまひいとてふよらけりあけり河よ

みをまそあままうりけり

よもくまー決

とあまをいそわらま玉りもりあまねんあま

あまひよまうひゆけり梅らあまのり

けあおやえられしよそあまのり

うらーけり

ちのち雲

のみち葉と風は満ちてみちのりともうる物な余なり  
月ゆらりあんとそよあつ

友原こけり

露と花のけり物とさひかえ我身も葉ふとあつり  
屋まひーそよけりなりふけり所あつ

あつとせしれ物

しめふゆらるるさひのけり物とさひかえ我身も葉ふとあつり  
うひのりあつあつりてゆけり人あつらん  
とそゆらりけりみちあつあつとあつらん

ひそーしてさよーやけりりよはけりいよさ  
葉よのりゆらりてさよふんをさよさ  
人よつせゆけりさ 友原こけり  
うらそめゆらりひららそよひさー

うらそめゆらり

古今和歌集卷第十七

雜歌上

野々々々

よんん人志し次

我うよ露そそをあらあまの月をさう。丹波の志つら  
ふとらゆとあせら秋う。輝あまのたつ物よそをけ  
う通うとたふけはまん。夜たよゆとふととほを  
限るれそらああゆとわら花の河とわあ。のよそ有ら  
あう人の心こ。これあふとれ乃あひまう  
らふいふのや

紫のひかりよよ。むさ。整はるふまう。河津とをな  
めのたさ。ととりてゆけう人よ。う人のさあ  
そくうとそ。よみく。やりけう

たりむれ物下

紫乃交られ時い。めとそら。に整あう。弟本そ。うはのけ  
大綱云。あるら。うれ。くふ。つひ。乃。朝。に。寧。ね。ら  
中綱そ。ふ。あり。け。う。河。そ。あ。ぬ。う。の。さ。あ。あ  
や。そ。く。う。と。そ。よ。あ。う

國經寛平六年五月五日に中綱云弟位二位

千内之綱云たが

近院右のおわい。ま。う。ら。る。者

色あ。と。ん。や。ん。う。らん。昔。ら。ぬ。ま。い。ふ。よ。そ。あ。て。い。の。と  
い。ま。の。神。乃。あ。ん。ま。う。う。あ。つ。ふ。せ。く。い。ま

ふらふらよはよいのりつげらとよふいんら  
ゆりたすのまらたれいよりいひひら  
とととよみくけりいけり

ゆらりいまみら

日の光やわらひいその上ゆりは雲ふれを嘆たり

高子貞観八年二月廿所十年十二月廿九日一皇子十一年二月廿九日為皇子

二条のふらふれ中よ東文の文よんを

元慶元年二月即位日為中久元年二月為皇太子

ゆげりけよおかりのふまうてなまひら

日よあら ならむれお下

ふらふらいひの山をきふそい神母のともいひら

五言のまひいおあふとらんいあら

ふらむねのむら

あまの風雲の通海吹さらよし女らうらうら

五言のけいあいらんらけをまのあらら

けらとみくけらあふんとあひひてあら

河原のたれおあいらら

ぬらふらふらいあふらあふらあふらあふらあ

寛平沖時うのさあひいよゆげらたのい

とあふらふらいあふらあふらあふらあふらあ

みされららあふらあふらあふらあふらあ

けらとみくけらあふらあふらあふらあふらあ

ふかきまなこにわたりては  
わがしるしをいふ人  
しるしをいふ人  
しるしをいふ人

かきつゝの物

玉にたれぬいづこ  
かきつゝの物  
かきつゝの物

かきつゝの物

かきつゝの物  
かきつゝの物  
かきつゝの物  
かきつゝの物  
かきつゝの物

かきつゝの物

かきつゝの物

かきつゝの物  
かきつゝの物  
かきつゝの物

かきつゝの物  
かきつゝの物  
かきつゝの物  
かきつゝの物

かきつゝの物  
かきつゝの物  
かきつゝの物  
かきつゝの物

ふれつしゆえ

ふれつしゆえある武月まのいつね置もむじとあ

池よ月乃みしげらとあ

ふれつしゆえある武月まのいつね置もむじとあ

池よ月乃みしげらとあ

ふれつしゆえある武月まのいつね置もむじとあ

池よ月乃みしげらとあ

ふれつしゆえある武月まのいつね置もむじとあ

池よ月乃みしげらとあ

ふれつしゆえある武月まのいつね置もむじとあ

池よ月乃みしげらとあ

ふれつしゆえ

ふれつしゆえある武月まのいつね置もむじとあ

慧子代始母院 天安元年二月 回し見えしれ武河は武院はゆげらあ

癪く其幸 慧子母藤列子後世上皇雄母 秘世莫知 若知は若先是 又有此幸 又有此幸 遂致癪早

元慶五年 くれはあ あま敬信 ころのわと母

正月六日薨 少迷子 大元 大元 ころの月 ころの月 ころの光 ころの光 げらあ

二年 二年 退 退 ころの光 ころの光 げらあ

ふれつしゆえある武月まのいつね置もむじとあ

ふれつしゆえある武月まのいつね置もむじとあ





ゆげの時はありひくまつるをよそ可し  
えゆりりきりす結なれはをいりた  
んかんのひらひらみらるるをよそ  
りてまゝしていつりあげてみせたり  
なりてありとけり

返一 業平朝臣

昔ふらぬがのふたひ子母りてきくめこれあ  
寛平は時ふはりなれきり合ふ  
わりのひのひ

志く若れやふり志きゆつらうとあはげらう那  
れがー山時らうのさあひあくまのこた  
よあがみえだまひておほみあそひわり  
けつひふはうまら

わいゆきり節

老ねとてなとう我身とせあふきんはよかふはあ  
むらう字落の格ちられとあ道とあ思ひのお  
我みくもくぬねはのほり岸の娘松くよおん  
佐吉の落れひあ松人あうりて母らるるとはほめ

梓弓いさくの小松ある母ありより母ひしてた孫ひとと  
この方いある人ひいてかきおりの命ある也  
ろけいそやけいさんたらはれたのよあそちぢぢぢぢ

藤意おらうせ

非どうもきろくよせんさ妙の松と昔れともあひなく

よみ人しらす

まろ海ありあるあひひようふあは消お物うつも  
わろいしはらよある白おは故としてゆかりらま  
和南の系とせらる故のまにまみんのりまひ出し結を  
雛波といをなつらにしあまなだの結よまあるあは

ほしゆいりりさうんあひねりけしゆいし  
よりいさまいしゆいしゆいし

友原あふい

美とあひおらるは漢は語あるあつる鳥とをわいとたふはく

也ー  
ほしゆい

おら波あひの漢はゆね松のあふより美とねいあは  
なよりいしゆいしゆいし

雛波といあつるあつるりそあはあまもそ我はあひあ  
あひいあつるあつるのあひあまひもあひあ  
あひああつるあつる

とふくひぬむ

後者（お）まはしつゝあつぬふか（お）まはつたふか

ふか（お）まはつたふか（お）まはつたふか

あひてゝあつ

はつゆゑ

あふりたふかのつゆゑ（お）まはつたふか

法皇あふふたつて（お）まはつたふか

すふあつたふか（お）まはつたふか

たまひつ

あつたふか（お）まはつたふか

中務教房（お）まはつたふか

あつたふか（お）まはつたふか

あつたふか（お）まはつたふか

あつたふか（お）まはつたふか

あつたふか（お）まはつたふか

あつたふか（お）まはつたふか

あつたふか（お）まはつたふか

あつたふか

あつたふか（お）まはつたふか

あつたふか（お）まはつたふか

在原行平の



ねるーきーいーあー

いーい

風が吹く色はぬいすかきよとてあつらひまきけり  
田ひし津河は女まきのさやういし内屏  
風の志山後一けりふあはれおらよりきと  
とるなりーこれとむかひくさうあー  
やぬ人はわがせしきふれいあ

三条乃町 推高のみれ母

こひきくらのあはれおらわらわらあはれい  
屏風乃志けり花とあ

はーゆあ

さねあめ河より後らうとて母まられあはれつねあ  
屏風乃志よよみあはれい  
坂上これのい

あまそわと田のいひりてあはれい  
いーい 秋のあをれい

古今和歌集卷第十八

雜下

野々子

よみ人志す次

世中いぢふうつひあわさる川はつる園をきふ世あ  
いほとわじ我身とけそとく何れはる思ひ  
初ふらむのれあきかた世のこほひの世中た  
そのこをむしる下

あらしそむむ色あいにしと道軍あきれあわさ  
ふらうにゆきつ河原まらりのちとけ  
今よりけりよれいれ

都人いふとさくびあつたれあ書あふり  
文庫のやとむしうんはにありて  
あふみえそあふりあふり  
あむらふあふり 小野小町  
俺おとあふりあふりあふりあふり  
野々子

あふれふとさく世中と思ひあふり  
よみ人志す  
あふりあふりあふりあふり  
あふりあふりあふりあふり  
あふりあふりあふりあふり

世中いふやうにうらた身はさすよきものなしてあはれに  
 しのぶらうこ我身ばかりはふはむもせんあはれ  
 心にとほのこしにわづらひするもはふはむもせん  
 りれいりかみ  
 白雲のたかきまはらにけりてはふはむもせん有  
 ぬ  
 ぬらうのまはら  
 ちりよきんらてはふはむもせん中い彼のさうる風そまはら  
 そわら  
 りていかにゆらきとてはふはむもせん味をき  
 こへん  
 〇 不気

昔の昔のうらた身はさすよきものなしてあはれに  
 しのぶらうこ我身ばかりはふはむもせんあはれ  
 心にとほのこしにわづらひするもはふはむもせん  
 りれいりかみ  
 白雲のたかきまはらにけりてはふはむもせん有  
 ぬ  
 ぬらうのまはら  
 ちりよきんらてはふはむもせん中い彼のさうる風そまはら  
 そわら  
 りていかにゆらきとてはふはむもせん味をき  
 こへん  
 〇 不気



おのゝこころはけりし

凡河内守の縁

おのゝこころはけりしおのゝこころはけりし  
おのゝこころはけりしおのゝこころはけりし

今更なるおのゝこころはけりし  
おのゝこころはけりし

おのゝこころはけりしおのゝこころはけりし  
おのゝこころはけりしおのゝこころはけりし

おのゝこころはけりしおのゝこころはけりし  
おのゝこころはけりしおのゝこころはけりし

おのゝこころはけりしおのゝこころはけりし

たぐひし朝臣

おのゝこころはけりしおのゝこころはけりし  
おのゝこころはけりしおのゝこころはけりし

おのゝこころはけりしおのゝこころはけりし  
おのゝこころはけりしおのゝこころはけりし

左原守平朝臣

おのゝこころはけりしおのゝこころはけりし  
おのゝこころはけりしおのゝこころはけりし

おのゝこころはけりしおのゝこころはけりし  
おのゝこころはけりしおのゝこころはけりし

平家朝臣  
寛平六年  
右少将

あまのこをよきとて今思我う人かよとたなせ  
けりといふもよきとてけりけりけりけり

平家朝臣

うらむとていふもよきとて今思我う人かよとたなせ  
あまのこをよきとて今思我う人かよとたなせ  
あまのこをよきとて今思我う人かよとたなせ  
あまのこをよきとて今思我う人かよとたなせ

清原朝臣

けりけりけりけりけりけりけりけりけり  
けりけりけりけりけりけりけりけりけり  
けりけりけりけりけりけりけりけりけり  
けりけりけりけりけりけりけりけりけり

清原朝臣

あまのこをよきとて今思我う人かよとたなせ  
あまのこをよきとて今思我う人かよとたなせ  
あまのこをよきとて今思我う人かよとたなせ  
あまのこをよきとて今思我う人かよとたなせ

平家朝臣

あまのこをよきとて今思我う人かよとたなせ  
あまのこをよきとて今思我う人かよとたなせ  
あまのこをよきとて今思我う人かよとたなせ  
あまのこをよきとて今思我う人かよとたなせ

河よむもよなむしむきせんよそふよとひひとく  
あつりけつ河よはらかひまうりあつとさて  
来あつはまそてんえらつとつらつらつら

なりむれ物下

今そあつらつと物と今まひひとふれとふらつら  
これあつれみこつらひひまうりかひひひつと  
しつらつらつとそふのつらふはつらつら  
正月ふとあつらつとあつらつらつらつら  
むえれつらつらつらつらつらつらつら  
つらつらつらつらつらつらつらつら

あつらつらつらつらつらつらつらつら  
つらつらつらつらつらつらつらつら

あつらつらつらつらつらつらつらつら  
深草のつらつらつらつらつらつらつら  
てそつらつらつらつらつらつらつら

返一 しみ人不知

あつらつらつらつらつらつらつらつら  
むらつらつらつらつらつらつらつら

我と君ならぬ湯よわらつらつらつらつら

ふのこいあつてむしーれこいあつてけつさ  
ふれおこいあつてむしーれこいあつてけつさ  
むしーれこいあつてむしーれこいあつてけつさ  
むしーれこいあつてむしーれこいあつてけつさ  
むしーれこいあつてむしーれこいあつてけつさ

返一

雖波こいあつてむしーれこいあつてけつさ  
今又よあつてむしーれこいあつてけつさ  
あつてむしーれこいあつてむしーれこいあつてけつさ  
あつてむしーれこいあつてむしーれこいあつてけつさ

三糸

あつてむしーれこいあつてむしーれこいあつてけつさ  
あつてむしーれこいあつてむしーれこいあつてけつさ  
あつてむしーれこいあつてむしーれこいあつてけつさ  
あつてむしーれこいあつてむしーれこいあつてけつさ  
あつてむしーれこいあつてむしーれこいあつてけつさ  
あつてむしーれこいあつてむしーれこいあつてけつさ  
あつてむしーれこいあつてむしーれこいあつてけつさ  
あつてむしーれこいあつてむしーれこいあつてけつさ  
あつてむしーれこいあつてむしーれこいあつてけつさ  
あつてむしーれこいあつてむしーれこいあつてけつさ

あつてむしーれこいあつてむしーれこいあつてけつさ

返

宗岳大親

君とのまじりたることなるに言れさゆらされわら  
うかりけり人よけりうけり

さめつてせり

さういふはなれはよもあふそおれそ

罪しらす 人不知

いふは中におんふらやゆりの運はあまの運に  
わらぬまのふりてきくはあひいさませれそは  
いかにけり

我居部のありことそかじゆらうらんいふあり

よかん人あす

あふたりあわれの者もあよもせん人のいふ  
はまよりあつたはあまのあまのあまの  
あつたはあまのあまのあまのあまの

よかん人あす

院のいふはあまのあまのあまのあまのあまの  
あまのあまのあまのあまのあまのあまの

けりあまのあまのあまのあまのあまのあまの  
二条 源のあまのあまのあまのあまのあまの

あまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの  
あまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの  
あまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの

母中いさむらひとわつらんゆふいぬふくやいふ  
お飯の嵐のせいにしとては来とねん倦つそわ  
風のふよあつらふあわらりけ身は来りらぬあつ  
家とつりていふ

伴響

あま川ふらむも何ね我着と甘ふらりぢあを  
けいふ約げり何はゆらりかひい  
きん人のいふ京ふりまといふ  
いふ  
無みいともゆすたのえおはしあそきりけり

女ともあらしのこりてわつあいの  
らりけりいけり

みらね 橋をふらぬ女

あはし神のなつふりりよきん玉ねあつ  
寛平の御時よりうらなう友よあされ  
てゆげり何ふ東家のゆやひうそをのこ  
ともさげあつあつあつあつあつあつ  
あつあつあつあつあつあつあつ

なま竹の葉あつあつあつあつあつあつあつ  
あつあつあつあつあつあつあつあつ  
あつあつあつあつあつあつあつあつ



そこのむらさきいけしよみくそそま  
つりけり 文屋あつとよ

祚月河多りきりつりぬのよはれあゆのよき流  
寛平時年あそふりけりつり

そまつりきり 大江千里

あもつりいひらそまそつりあゆのよき流  
有原うらなむ

金時よきよきまあたらひそまあふもみえん  
しりきりきりあそまつりよきよき  
ねふあつりけりそまつりけり

伊勢

あつりあつりあつりあつりあつりあつり  
かろりよきよき



古今和歌集卷第十九

雜神

短歌

野々乎

よみ人不知

あふしと乃 まれあうさふ ねりいそあ 我乃うつひよ  
 阿まよきれ ころく阿あく みの祢乃 りえはとら  
 おりいとも あふしとじ なるうさ 人とうらん  
 是る海の ねさよああて さいてー さいいさふ  
 ころくふ ありぬくや ゆく水の たゆ阿あ  
 くなあふ さいされて ぬら雪れ けかきあて

ありいとも えあのみされ けさやまの さいいさふ  
 ありい乃 山さいあれ ころくれて たふいんさ  
 魚さふさ けいさうえ 色よそえ 念りぬく  
 ときあめれ ゆくよあれ 念りぬく あえれくと  
 歌阿まり せんさあふ 小い出で ぬらあさふ  
 志ろあふ乃 衣れそみ せく露の ひかきあて  
 ねりいとも せうたけあ ころくすこ よまひいよ  
 ありんとあふ

ゆらこいあてまうりー阿のりころくれあ  
 ありん けく極あ

あやめやめや 祚のみことと 是行の 母はなほ  
あまのこの 身をたふす ともふす ことなれど  
はるはれ乃 そとそふ さままで 山にさす  
あまのこに あれ神えて しみき せうたの  
りみらとを みるの思ふ 祚は月 志をこして  
冬れよ乃 庭をたれよ あり雪の 様さえり  
年にとしに 阿よきき ありてふ ことひひ  
ふことのこ ちよふといふ 世の人乃 ちひすうれ  
ゆの縁れ ありていも ありてい わうあま  
ふらとるも なるんを ちらさめ こといひ

とくまの おせうま ちんくろ 中につい  
世のあ乃 うたがふい ちんあめ ことりす  
あまのたの みことと 思阿くと 様わく玉れ  
年ととく ちんまのこ 久ことろ ちんうわ  
けふとそ ちんみせぬ わやよの 思ふ事あ  
いまのちみ ゆうまぬれ りんやとわん

あつこいり ちんくろ ちんあめ ちんうわ

い 壬生忠峯

くまの乃 世はちん ちんうわ ちんあめ  
ちんあて ちんうわ のちん ちんあめ



わがえはくえん

君は世はねばぬといふはこころたるといひけりや

冬はあつこ 九河内務恒

子もゆり 祚を月とや けこよりハ くのさしとを  
しらとをさ ちみらとをさ ぶらとをさ しのたをさ  
ふたしとをさ さい日とをさ けのゆきハ 玉のたをさ  
とれらしし わたしとをさ ちとをさ ちとをさ  
あつ面よ じつとをさ 冬とをさ ちとをさ  
とをさの ちとをさ ちとをさ ちとをさ  
とをさとをさ

七条のふらえらせぬまひよけりといふ

ふみけり 伊勢

ねとをさし わたしとをさ ちとをさ ちとをさ  
せらあまの ちとをさ ちとをさ ちとをさ  
ちとをさ ちとをさ ちとをさ ちとをさ  
ちとをさ ちとをさ ちとをさ ちとをさ  
ちとをさ ちとをさ ちとをさ ちとをさ  
ちとをさ ちとをさ ちとをさ ちとをさ  
ちとをさ ちとをさ ちとをさ ちとをさ  
ちとをさ ちとをさ ちとをさ ちとをさ

徒頭寺

題 らす

よみ人志す

うらもよまをらうらうらよりの尸はわきその  
世もふ志あらくらまらうらふれ花をそ

返

まふれし世くふまらうらくみまよあぬま  
がふふくあめふらふ花のあまや

題不知

うらを川あうらうのよゆらうらわらわら  
をくみ色あひらんあいのまらわらわ

はくゆえ

うらみうらす見んうら山のりみら葉のうら  
月とくまらあめそのあうらわらわ

誦韻寺

題 らす

よみ人不知

梅花みふうらうらうらうらうらうら  
そせうは

山吹のむらさねやあまうらうらうらうら  
友原うらうらうらうら

ふんた回つたかゝるに何ものかしてあやういふ事あり  
十月の月をみよふにいづれかよふ事あり

有るのよきりふれ

あつたまゝにいふはあつたまゝにいふはあつたまゝにいふ  
題不知

凡何因に

ひらきしつゝいふはあつたまゝにいふはあつたまゝにいふ  
僧正上人

秋の聲をききしつゝいふはあつたまゝにいふはあつたまゝにいふ  
よき

妹をよきしつゝいふはあつたまゝにいふはあつたまゝにいふ

秋の聲をききしつゝいふはあつたまゝにいふはあつたまゝにいふ  
花をよきしつゝいふはあつたまゝにいふはあつたまゝにいふ  
寛平西河ふらふのまゝにいふはあつたまゝにいふはあつたまゝにいふ

有るのよき

秋風をよきしつゝいふはあつたまゝにいふはあつたまゝにいふ  
あつたまゝにいふはあつたまゝにいふはあつたまゝにいふ  
いづれかよふ事あり

清原ゆき

あつたまゝにいふはあつたまゝにいふはあつたまゝにいふ

きりらす

うし人不知

破のうきははひらみさひもあはれは我のそねのひら  
枕より泣くゝ恋のせめていせんとしあはれいかに  
意こころ方とていそあはれいせめていせんとしあ  
ありあはれいそあはれいせめていせんとしあ  
思はれいせんとあはれいせめていせんとしあ  
是よりいせんとあはれいせめていせんとしあ

ふのめれ

ゆのねがぬひよりのえり祿なきいおはれ様と  
紀のあつと

あひまきこりいすあありあはれい今月もゆひを  
まのこゆら

今月もゆひのちれあ思なきいひのちれあ思なき  
寛平のゆひいしあはれい今月もゆひを

友原たさむせ

きりらす  
きりらす  
きりらす

平貞文

春の世のよひいそこのしあはれい今月もゆひを

~~~~~

林の樹に花を咲かすは春の光を我々が待つ

~~~~~

蝉の羽のひらく音が夏の夜を照らす

~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~



平中興

あふの今もあふぬお世に來ふころそは月あかり  
たのむまはしらすん

りふれお世にこころいひお世にこころいひ  
かろき

あふの今もあふぬお世に來ふころそは月あかり  
伴勢

あふの今もあふぬお世に來ふころそは月あかり  
よき

あふの今もあふぬお世に來ふころそは月あかり  
よき

ねさうせ

あふの今もあふぬお世に來ふころそは月あかり  
よき

くれん

くれん 康源つらう女

あふの今もあふぬお世に來ふころそは月あかり  
よき

大楠 源つらう女

あふの今もあふぬお世に來ふころそは月あかり  
よき

花をたのむるの心はさしはらひてはなれりかゝ女あり  
今もたのむる心はさしはらひてはなれりかゝ女あり  
よき事に出でてはなれりかゝ女あり  
そふとてはなれりかゝ女あり  
中はなれりかゝ女あり

在原の心

よき中の心はさしはらひてはなれりかゝ女あり  
よき人の心

なふとてはなれりかゝ女あり  
花をたのむる心

花をたのむる心はさしはらひてはなれりかゝ女あり  
よき人の心

白雲の心はさしはらひてはなれりかゝ女あり  
よき人の心

梅花の心はさしはらひてはなれりかゝ女あり  
よき人の心  
よき人の心  
よき人の心

よき人の心  
よき人の心

題不記

古今和歌集卷第二十

大奇取御奇

あがふほひのさ

わはしとひの初よしくしそ中たよの御たの御たの

日本記よつるまうめまうのよまをよ

あがふほひのさ

あがふほひのさ

あがふほひのさ

あがふほひのさ

あがふほひのさ

あがふほひのさ

あがふほひのさ

あはれなれはけしきいふにいとむかし  
こころしくかたき

あはれならしきいふにいとむかし  
こころしくかたき

あはれなれはけしきいふにいとむかし

あはれなれはけしきいふにいとむかし

あはれなれはけしきいふにいとむかし  
こころしくかたき  
あはれなれはけしきいふにいとむかし  
こころしくかたき  
あはれなれはけしきいふにいとむかし  
こころしくかたき

あはれなれはけしきいふにいとむかし  
こころしくかたき

あはれなれはけしきいふにいとむかし

あはれなれはけしきいふにいとむかし  
こころしくかたき

あはれなれはけしきいふにいとむかし

あはれなれはけしきいふにいとむかし  
こころしくかたき

あはれなれはけしきいふにいとむかし

あはれなれはけしきいふにいとむかし  
こころしくかたき

あはれなれはけしきいふにいとむかし

あはれなれはけしきいふにいとむかし  
こころしくかたき

一途ハ元慶の由乃みのこゝし

若く母のうらみとあしなうるまはしはる敷のまはし

あは仁和の由れせのこゝし

大伴くらね

あまのやうなれはとあつたうひそそまのあつた

もハ今上乃由のちやれこゝし

東寺

みらねこゝし

あまのまにきかちらうのこゝしあまのまにきかちらう

みらのこれらういあまこゝしあまの由こゝしあまの由

わらわいあまのこゝしあまのこゝしあまの由あまの由

はるあまのこゝしあまのこゝしあまの由あまの由

あはちのこゝしあまのこゝしあまの由あまの由

りまのこゝしあまのこゝしあまの由あまの由

あまのこゝしあまのこゝしあまの由あまの由

はるあまのこゝし

あまのこゝしあまのこゝしあまの由あまの由

あまのこゝし

あまのこゝしあまのこゝしあまの由あまの由

ほいほいあかのみら葉おしらぬいづらくからあはれよ

いづら

くいのひとわかちをむらきいあよこわらふぢあつみの甲に  
甲斐ふねとゆきいこいつゆ風とふあまつらむこくそがん

作歌い

おめいはいと長はにわいひりらあはれもなすまはれ  
冬に候後乃さつらのい

有原とくしゆさげ下

ちこわつらのおもりの屋しりれひめ山松とらふの母

ぬいそとるさつらに

家々梅證平々中在書入心墨減奇 今別名

卷第十 物名部

いんくーー けくゆゑ

海へま本ひくじ足川のせ山ひくく心あり

在郭云下 空野上

勝信

くきつてまふとくは原れなとえんくくいめいんかめめ

くくあまれ本友則下

くまのたも つく梅も

くくくきつてまふとくは原れなとえんくくいめいんかめめ

忠弟 利貞下

くくいの井 ぐくい海

くくのい海

くくいのめまふとくは原れなとえんくくいめいんかめめ

くくいと 清形下

くくあこれ ぐくい

あやのら

くくあまふとくは原れなとえんくくいめいんかめめ

くくあまふとくは原れなとえんくくいめいんかめめ

あやのら

桂文下

卷第十一

奥山よりこれねあつていふる書下

きふ人といふふふふ川あつるいふふねいふふとせり  
よれりいふお飯のふれいふいふいふいふいふいふいふ  
本第十一

いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ  
いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ  
返  
いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ  
いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

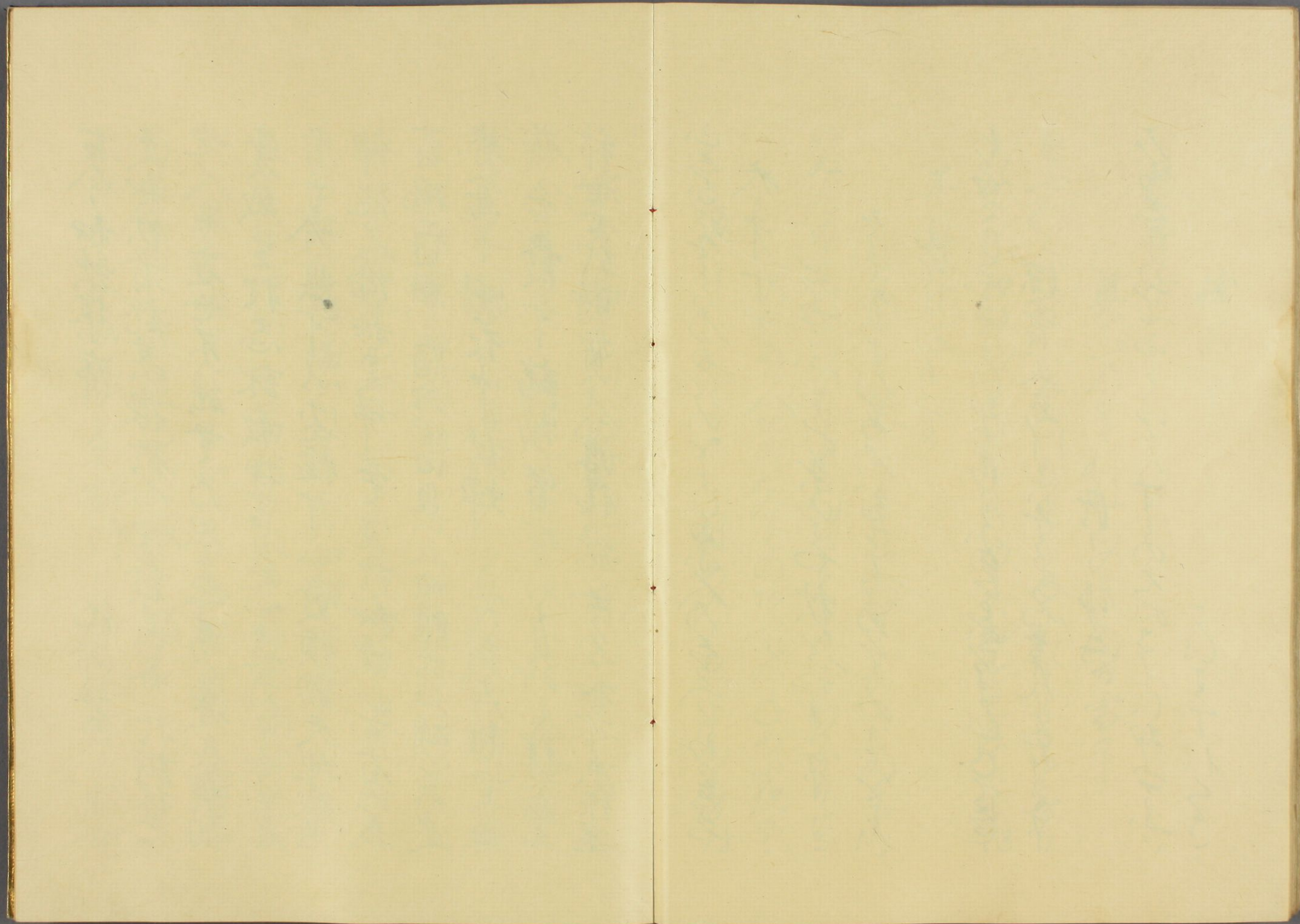
いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ  
本第十一

いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ  
いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ  
いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ  
いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ  
いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ  
いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ  
いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ  
いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ  
いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ





古今和歌集序

紀泚望

史和歌者託其根於心地發其善於詞林者也人不能其為思愈易遷善樂相愛感生於志詠形於言是以遠者不覺其者之吟悲可以述懷可以發憤動天地感鬼神化人倫和史婦等直於和歌和歌有六義一曰風二曰賦三曰比四曰興五曰雅六曰頌其史者鶯之轉花中秋蟬之吟樹上雜其曲折者發乎謠物皆有其自然之理也然而神世七代時賢人淳情欲云分和歌未作遠

子素美為等刊出雲國始有二十一字之詠今反方之作也其後隆天祚之臨海童之女等不以和歌通情之愛及人代此風之興長秋經乎旋頭混印之類雜神也源流漸繁譬猶拂雲之樹生自寸苗之於浮天之波起於一滴之露至如難波津之竹獻天皇守緒川之篇報太子武事開神異或興入幽玄但見上古等之存古質之語未為耳目之歌徒為教誡之端古天子每良辰養京報侍臣預宴筵之獻和

欽君位之情由斯可見賢愚之性於是  
相分而心隨民之欲擇之也自天津皇子  
之初作詩賦詞人女子慕風繼塵揚波漢家  
字化我日域之俗民業一改和方漸衰然猶  
有先師撥萃去吏者高振神妙之思獨  
步古今之間有山色赤人者並和奇絕也  
之解業和奇者綿綿不絕及彼時愛澆漓  
人貴奢淫浮利雲興艷流泉涌之實皆  
落于輩孤榮至之好多之故以此為花鳥  
之伎乞食之客以此為活計之謀友事

為婦人之右難進丈夫之前近代存古  
風志終二三人然長短不同論以可辨花山  
僧正尤奇神然之詞美而少實如畫  
畫好女徒動人情在系中將之奇之情  
有竹其約不足如菱花臨少款色而有薰  
香文琳以蘇物然之奇神道俗如賈人之著  
鮮衣宇治山僧岳撰其詞美辭而首尾修  
滑如望秋月迥曉雲小野小町之奇古  
衣通姬之流也然艷而有氣力如病婦之  
着花粉大友黑主之欽古猿丸左吏之次也

頗有逸具而神甚鄙如田夫之息於前也  
此亦民姓流罔志不之勝救于大庭豈敢  
為其去不知奇之趣者也借人年事業利  
不用諫和奇些或之雖貴為相將富傳  
全後而骨未腐於去中名先滅世上適為  
後世被知志唯和奇之人而已何者稽述人  
耳義貫神明也昔平城天子詔侍臣令  
撰新葉集自余以來時歷十代救過百  
年其後和奇不救採用雖風流如  
野宰相控情如在納云而皆以化文罔不

以斯道啟

陛下河宇至今九載仁流秋澤例之介惠  
茂苑波心之陰測愛為漸之考率因以砂  
長為叢之頌洋之滿耳思繼既絕之風欲  
興久廢之道安能大內記紀友則河書亦  
預紀貫之甲裝少自凡河內新恒在案  
門府生壬生忠只今等名獻家集并古集  
回可曰續萬葉集於是重有詔部類不  
奉之欵勅為二十卷名曰古今和奇集后  
亦稱少表記之艷名竊秋彩之長況或進

思時倍々嘲退慙又蘇云々拙適遇和方々  
中興心樂吾道々再昌嘆辛々九既沒想  
不在斯々子何延去五年歲次し丑四月十  
五日信貫々々未律序

此集家之取擇雖說之且任師說  
又加之見為後學之說本不取老眼  
之不堪多自書之

近代僻案之好士書生之失措稱有  
職之秘事可謂道之魔姓不可用  
之但如此用捨只可隨其身之取好否  
好自能之若別忘同之隨之

貞應二年七月廿二日 英美 戶部尚書藤 出判  
曰廿八日令換合紙書入為字早  
傳之嫡孫可為將來之說也

觀應二年十月二日書寫畢

西方行者頓頌

何如光物最正

贈歌二卷十員二日



以下  
3丁  
白紙

